

武蔵野日曜聖書講筵 祈禱会

祈らないではいられない

――ルカ伝第18章1～14節――

1973年5月20日

小池辰雄

祈らないではいられない 聖霊を受けとることが祈り 悲願が本願をもって受けとられている
聖書を読みながら祈っていた 砕け・どん底・無者 あなたの本願が成るように

【ルカ18・1～14】

1 また彼らに、**落胆**せずして常に祈るべきことを、**譬**にて語り言い給う
2 『**或町**に、神を畏れず人を顧みぬ裁判人あり。3 その町に**寡婦**ありて、**屢次**
その許にゆき「我がために**仇**を審きたまえ」と言う。4 かれ久しく聴き入れ
ざりしが、其ののち心の中に言う「われ神を畏れず、人を顧みねど、5 此の
寡婦われを煩わせば、我かれが為に審かん、然らずば絶えず来りて我を悩ま
さん」と』6 主いい給う『不義なる裁判人の言うことを聴け、7 まして神は夜
昼よぼわる選民のために、たとひ遅くとも遂に審き給わざらんや。8 我なん
じらに告ぐ、速かに審き給わん。されど人の子の来るとき地上に信仰を見んや』
9 また己を義と信じ、他人を軽しむる者どもに、此の譬を言いたもう、10 『一
人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、一人は**取税人**なり。
11 パリサイ人たちて心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、**強奪**・**不義**・
姦淫するが如き者ならず、又この**取税人**の如くならぬを感謝す。12 我は一週
のうちに二度断食し、凡て得るものの十分の一を献ぐ」13 然るに**取税人**は遙に
立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言う「神よ、**罪人**なる我を
憫れみたまえ」14 われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己
が家に下り往けり。おおよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者
は高うせらるるなり』

●祈らないではいられない

ルカ伝18章です。

1 また彼らに、**落胆**せずして常に祈るべきことを、**譬**にて語り言い給う

「常に祈るべきこと」「この」「べき」は非常に強い「べき」で、「祈らざるを得ない」とい
う意味です。



「もう祈らないではいられない」

と。空気を吸わないではいられないように、魂は祈らないではいられない。ということ
 譬えで言われた。

2 『或町に、神を畏れず人を顧みぬ裁判人あり。』

キリストの譬えというのは面白いですね。キリストは大胆にこういうことを言われる。

3 その町に寡婦ありて、屢次その許にゆき「我がために仇を審きたまえ」と

言う。4 かれ久しく聴き入れざりしが、其ののち心の中に言う「われ神を畏

れず、人を顧みねど、5 此の寡婦われを煩わせば、我かれが為に審かん、然

らざば絶えず来りて我を悩まさん」と6 主いい給う『不義なる裁判人の言う

ことを聴け、7 まして神は夜昼よばわる選民のために、たとひ遅くとも遂に

審き給わざらんや。8 我なんじらに告ぐ、速かに審き給わん。されど人の子

の来るとき地上に信仰を見んや』

18章の今のところ、それから9節から14節と、二つ大事な譬えが書いてある。祈りの
 二つの大事な型——型といつてはおかしいけれども——在り方なんです。

要するに、波も寄せては返し寄せては返しているうちに、岩に穴を開けてしまう。

『点滴石を穿つ』

という。そのように、祈りも絶えず祈る。親鸞も99日を祈り続けて遂に満願の日に法然に
 でつくわすことになった。あるいは一生祈らなければならぬかも知れない。この譬えでは、
 とにかくしかし、

『あまりうるさいから、まあ聴いてやろう、審いてやろう』

と、こういうわけです。「不義なる裁判人」というのは。

「いわんや神は夜昼よばわる選民のために、たとひ遅くとも遂に審き給わざら

んや。いや、我なんじらに告ぐ、速かに審き給わん。けれども、人の子の地

上に来るときに信仰を見んや』

と。私たちはこの「選民」です。「選民」というのは神さまが一方的に選ぶのであって、こ
 っちの善さによるのではない。それは人間的な相対的には善いやつもいるし、悪いやつも
 いるし、いろいろだ。神さまはそのいろんな人間をいろんな角度から捉まえるわけです。
 人間の判断なんていうのは浅はかですからね、ひとつの表現でもって人をすぐ見るけれど
 も、そうじゃないんだよな、神さまの人の見方というのは。だから、人をすぐ品定めする
 やつは嫌いなんだよな。その中に必ず何かその人を使う何ものかがある。神さまはそれを
 見ているわけです。

そういう選民で私たちはありますから。

「いわんや選民のために」

と。神の国を展開するために選ばれた。「選民」というのは、神の国を広めるために、人に



福音を宣べ伝えるために、生涯を通して福音の証をさせるために選んでいるので、選ばれたということは証をする責任を負わされたということです。こつちがどうだではない。選ばれたので

「めでたし、めでたし」

でお終いなんていうものではない。そうしたら、めでたくなってしまう。選ばれたということは責任を負わされたこと。責任を負わされたということは、栄光を与えられるということですよ、もうひとつ言うと。責任と栄光とは、またこれが相即している。そして、その栄光は神の栄光がそこから現れる。それはもう必ず天国を飾ることになるわけだ。それがその「選民」ということです。

ですから、私たちは責任と栄光を与えられている。私は獨協で言うんですよ。

「獨協は天下の獨協だ。お前たちはそれだけの責任をもつて、それだけの光栄を感じろ。そしたらもう、へんてこなことはできないはずだ」

と。そういうわけで、高等学校生でも中学生にもはつきり言う。

● 聖霊を受けとることが祈り

絶えず祈る。

「常に祈るべきこと」

という。たゆまず祈らざるを得ない。空気は吸わざるを得ない。御飯を食べざるを得ない。魂は祈らざるを得ない。その

「魂は祈らざるを得ない」

ということをやらないわけだな。だから、魂が枯渇してしまう。そして、

「何のかんの」

とすることが一般の状況です。ところが、キリスト教界で祈りが非常にダメなわけです。

大体、私が育った無教会がそうだった。何か無教会に欠けている。聖書研究は立派ですよ。世界の一流の学者もいますよ。けれども、祈りの世界が欠けている。内村鑑三先生や藤井武先生に私はついたけれども、祈祷会はなかったものね——昔はあったそうだけれども——そういう祈りが足りない。手島君はそれに気がついてくれた。彼も大事な男です。

祈りの世界でもつて、とにかく私も突破させられた。それは何が祈りで大事かというところ、問題です。聖霊を受けとることが祈りです。祈りの世界でなければ聖霊は受けとれないんですから。いくら、聖霊ということを研究したって、ただ読んだだけだったらダメなんです。それは祈りの世界で聖霊を受けとって、

「この御霊には替えられない」

ということがいよいよはつきりしてきた。だから、私は一步も退かない。日本中の、あるいは今までの友人たちが何を言っても、びくともしない。それだけの私は本当に自信なら



ざる自信がある。それはどこから来ているかということ、祈りの世界を通して頂いたこの聖霊から来ているわけです。

祈りは一体、何を求めるかということ、御霊を求める。

「御霊を賜らざらんや」
たまわ

と。今度は御霊の中の祈りになる。私は人と話しているうちに、私自身が異言になりそうになる。キリストの中に私はグツと入ってしまうと、語っているうちに異言が出てくるから、時々押さえなければならぬ。そういうわけで、一体、本当におかしいですよ、私は。私みたいな霊的でない男が、なぜこんなに御霊のことがはつきりつかめるようになったかということ、世界の七不思議なんだ(笑)。

私はいわゆる霊的、霊、三昧というやつは嫌いなんだ、正直。当たり前なのが好きなんです。けれども、その当たり前前の中に、一番もの凄いのものがやってくるから、これがしょうがないというだけの話です。ですから、本当に

「祈らないではいけない」

ということ。いや実に、「祈る」ということがもはや言葉でもない。ただもう自然に、道を歩いていても、魂の姿勢が、心と魂の姿勢が祈りの姿勢なんだよね。

そうなってくるとこれはもう、「祈りの姿勢」とはどういうことかということ、

「キリストの懐に入っている、キリストと一緒に歩いている」

という、そういう姿勢です。これが祈り。キリストは、父の懐にあって祈っておられた。夜もすがら山で祈られる時にも、完全にキリストは父の懐に入ってしまうわけです。それだから、本当に

「我と父とは一つなり」

ということ、その中でもものを言っているんだ。キリストは、

「父の懐の中で一つなり」

と言っているの、無理やりに向こう側にいるキリストの

「父なるものと俺は一つだ」

と言っているのではない。

● 悲願が本願をもって受けとられている

私が、

「キリストに酔う」

と言うことは、キリストの中に入って酔うのであって、キリストの中に入って酔っているわけです。それは「酔っている」ということは、実は一番目覚めているということなんだ。「酔う」ということと「目覚める」ということが一つなんだ、この世界では。これは酔っぱらって眠ってしまうのではないですよ。魂は本当に目覚めている。キリストに酔っていると

いうことは、魂がもの凄い目覚めの中に実はある。普通の酒に酔うやつは眠ってしまうよな。そういうのとは違うんだ、同じ「酔う」という言葉を使いましてもね。そこらは間違えなように。

「祈り三昧で、何だか変てこな声を出している」

なんてことではない。そういうように、

「常に祈らざるを得ない」

としていけば、神さまの方ではまた聴かざるを得ないんです。神さまの方では聴かざるを得ない。ですから、もうその世界は既に聴かれています。即ち、イエス・キリストの中に十字架を通して抱かれていますということは、一番根源的にはこちらの悲願が本願をもって受けとられているということなんです。悲願が本願で受けとられているということは、たとえ直線的にその悲願が現象的には聴かれなくても、もっと奥の世界で聴かれています。

内村先生が『聴かれざる祈り』なんていう本を書いているけれども、それを私は初めごもつともと思つて読んでいたけれども、しかし、今もういつペン読み返せば、何か言うかも知れないよ。聴かれざる祈りは無いんですよ、本当は。表面的には聴かれざる祈りはあるかも知れないけれども、一番根源的には聴かれています。祈られています以上に聴かれています。祈られている通りに聴かれていますのは、本当に聴かれていますのではないんだ、本当は。祈られている通りに聴かれていますのを、それをもつて

「聴かれた、聴かれた!」

なんてやっているのは、ある意味において御利益ごりやくになる。それで喜んだつて悪くはないよ。けれども、へたすると、それは御利益宗教になつてね。そうすると、

「俺は聴かれないのは、祈りが足りないのか」

なんて思う。そのうちにくたびれてしまって、

「もう止めよう」

なんてなことになる。そうじゃなくて、私のは凶太いんだ、始めっから。

「祈りたることは聴かれたりとせよ」

とキリストの御言がある通り、一番根源的には聴かれています。根源現実こんげんじつにおいては祈った以上に聴かれています。こんな有り難いことはないではないですか。

だから、私は本願道ほんがんどうということが大変好きになつてしまった。本願の道はもうズレがないわけです。こっちはどんなにズレたつて大丈夫だよ、本願にはズレがないから。全託しているんだから。間違つて運転したと思つたら、実はもつと大きな大道を運転せしめられていたというようなもんだよな。

●聖書を読みながら祈っていた

そういうような具合で、もう祈りが楽しくてしょうがない。祈らないでいたら、力がこ



ないものね。聖書を読むのだって、読みながら祈りの世界ですからね。もう本願の文字なんだから、キリストの言葉は。本願の文字の中に自分を乗っけていけば、もう祈りはそれでもってグングン、祈りの世界に実は入っているんです。祈祷会しようという時に、

「さあ、ではひとつ聖書を読みましょう」

と言って読んでお終い。

「なんだ、ちつとも祈らないではないか」

「そうじゃないよ、聖書を読みながら祈っていたではないか」

というわけだ。

私はそこまで、皆さんにむしろ種明かししないで、やればよかったな(笑)。ですから、どこでも、あなた方は聖書を聞いて、人に何と思われたっていいよ。

昨日も、私はクラス会で言った、

「私は聖書を読んでいると、すぐその世界に生命が来てしまうから、楽しくてしょうがない。研究会なんかしているのではないから、いつでも来たいやつは来い」

と。今日はやって来ないけれども。

そういうわけで、このルカ伝18章1～8節は結局、それだけの話だ。そういうようにして、キリストの懐に、あるがままにして投げ入れれば、直ちに祈りの世界であり、同時に祈られたことは祈られた以上に聴かれている。いいですか。

「どうかな? 私はいつ誰と結婚できるのだろうか?」

なんてやっているわけだ、みんなね。皆は可能性の人間ばかりだから——私はもう可能性の人間だけでも——そういうところが、あなた方はもう実は成就している。そのうちに神さまが一番最善にしてください。そういうわけでいきます。

もし、相手がいなければ、キリストと結婚すればいいよな。これは最高なものな(笑)。ことに女性はいいです——まあ半分冗談ですけども——とにかく、どんなことがあっても、どんなに行き詰まったように思われても、実は行き詰まったと思ったところが最も凄い世界だということ。それはキリストを本当に得てごらん。キリストと本当に一つになつてごらん。それはもうはつきりそれが言えるんです。それで現実を完全に乗り切るし、それから本当の荷のないの世界に入る。これが、祈りはもう絶対、一番大事なことは、その意味において祈りなんです。一番大事なことは祈り。そして、それは御霊が本来に来る世界だから。御霊が何ものとも換えることのできないものだから。自分の生命より大事なものは御霊なんだ。そうしたらば、御霊は私たちに永遠の生命、天国を展開していく。

● 砕け・どん底・無者

もうひとつ、その先、9節から14節。

9 また己を義と信じ、他人を軽しむる者どもに、此の譬を言いたもう、¹⁰『¹¹



人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、一人は取税人なり。
 11 パリサイ人たちが心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、強奪・不義・
 姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。12 我は一週
 のうちに二度断食し、凡て得るものの十分の一を献ぐ」

非常に宗教的なんだな。このパリサイ人は宗教的、道徳的な人間で自認しているわけだ。
 こういう宗教臭いのは大嫌いなんだ。キリストはそういう宗教臭いのは嫌いなんだ。

13 然るに取税人は遙に立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言う「神
 よ、罪人なる我を憫れみたまえ」

それだけだ、祈りは。

14 われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往
 けり。おおよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらる
 るなり」

これは私は『無者キリスト』（著作集第1巻）の中にも書いていますけれども。人間を、人
 類を二つに分けるのは、この祈りの世界です。己を義とする人間と、碎けの人間。傲慢な
 人間と碎けの人間。人類を二つに分けるのは、一番大きな二分はそれです。即ち、己を義
 とする者は地獄行き、碎けは天国行き。どんなに立派であっても、己を義とする者は、「どつ
 こい」といつて、天国の門は塞がれてしまう。そういうわけです。

こんなに「義」ということを聖書は言いながら、

「自分で自分を義とするやつはダメだ」

と言う、キリストは。だから、イエスは、

「なんぞ、我を善しと言うか。善きものは神さまだけだ。なぜ、私を義と言うか。

義は神のみぞ」

と。そうすると、キリストは義人である。こういうことです。これは結局、自分は何もの
 でもないということ、碎けは。それが「無者」です。この無者の立場に自分を置かざるを
 得ない。あるいは「どん底」と言っただけいい。「碎け」と言おうが、「どん底」と言おうが、
 「無者」と言おうが、同じことです。そういうどん底に自分を置く。どん底なんだから、い
 いじゃないですか。

「少し上の方にいろ」

とか、

「いっまで上つていっこ」

なんて言うのではなくて、

「ぶっ倒れてそこにいろ」

と言うんですから、「ぶっ倒れていろ」ということ。或る所にぶっ倒れていることが、平伏
 しが、これがどん底。そこで、どうせ自分もうダメのカスだから、



「神よ、罪びとなる我を憐れみたまえ」という、

「私はあなたに直結できないダメな野郎です。もう整っておりません。破れそのものです」

と。「破れそのものだ」と言つて、自分を本当に投げ出す。神さまはそういう砕けの魂が大好きなんだ。それは本当に玉砕すれば玉成するわけです、玉と成る。それは誰かということ、キリスト自身がそうなんだから。

●あなたの本願が成るように

彼は罪びとなる我として——彼は罪びとではないんだけど——自分を罪びとにしてしまったんだ、キリストは。十字架に架かった。十字架に架かったということは、自分を罪を負ったということ。だから、

「罪びとなる我を憐れみたまえ」

という一番凄いのは、キリストの十字架の姿ですよ。

「こんなにも人の罪を負った私を憐れんでください。なぜ、お棄てになるんですか」というわけだな。そういう、本当にキリストは私たちと同じ、

「私たちがどんなにダメであっても、いいんだよ、それで」

と。それでいいんだと。

「いやダメであるからこそ、私はお前を捕まえるぞ」という。

という。

「お前はもう少し善くならなければ、つかまえない」というのではないんですから。

「ダメだから、泣いているから、悲しんでいるから、幸いだ」と、キリストは言われた。しかし、

「自分はダメだ、悲しいんだ」

「自分はダメだ、悲しいんだ」

と云つて、そこでキリストに向かつて、神に向かつて、身を投げていなかったらダメですよ。ただそこで神さまから逃げ、キリストから逃げ、人から逃げ、お終いでは仕方がない。それだったら本当に救われないよね。ダメなもの、悲しい自分、ダメなやつをそのままキリストの中に投げる。そうしたら、

「よしっ！」

と云つて、これをもの凄いいことにしてくださるわけです。

これが、取税人の祈りは、

「神よ、罪びとなる我を憐れみたまえ」

と云つて、自分を挺身するわけです。いいですか。そこが大事なところだね。



「憐れみたまえ」

といって、相手は神さま・キリストですから、それに自分を投げかけているわけです。投げかけているから、神さまはグツと抱いてくださる。そういうわけです。ところが、

「私はお蔭様で、これこれの善いことをしております」

なんて、何ぬかすかと。整っているやつはダメなんです、片一方の自己義認は整い家や。整いやの信仰はダメ。言うことは完璧なことを言ったってダメなんです。言うことは完璧なんだ、宗教的なんだ、非常に。いわゆる宗教的な完璧は、キリストには

「それはダメだ、自己を誇っているようなことではダメ」

と。無限無量な本当のものは、義も愛も聖も一切のものは上から来るから。それを受けとって進んで行く。

祈りの姿は、どっちにも共通していることは要するに、自分を投げかけることです。もう繰り返して繰り返して、祈りを続けていくという、それも結局、投げかけている。投げかけを続けるわけです。己を投げかけることにおいてどっちも共通なわけです。

この18章の前半の祈りは、自己を主張して祈っているのではないですよ。本当に自分の悲願をむしろ、

「私の悲願ではありません、あなたの本願が成るように」

と。言い換えれば、そういうことだよな。悲願を持って行きながら、

「私の心はこうなんです、お願いはこうなんです、お願いのもうひとつ奥の境界をどうぞ受けとってください」

と。お願いを持っていきながら、お願いに絶しているわけだ。そして、キリストの本願を受けとるわけだ。それだから、楽ではないですか。

「私のお願いは一体、本当なんだろう。間違っていないだろうか？」

と。間違っているよ、みんな（笑）。それで、

「まだ祈り方が足りないんだろうか？」

と思う。

「こっち側の熱心ではありませんよ、そのまま行きなさい、そのまま投げに行きな

なよ」

ということ。いわゆる自分の「熱心」にも絶することです。

説明のしようがないけれども、仕方がない。そうしたらば――ああ、異言になりそうだ…(異言) ……そういうことで、もう本当に私は楽しくてしようがないんだ、これを読んでいるとね。

皆さんも、その呼吸がわかるでしょ。呼吸がわかったら、私はみんなに抱きつきたくなくて困るんだよね（笑）。それではお終い。

